

五国の多様性と交流―兵庫地域史研究の新たな試み―

常 任 委 員 会
第七四回（兵庫）大会実行委員会

1 地方史研究協議会は、第七四回大会を二〇二四年一〇月一九日（土）・二〇日（日）の二日間、兵庫県神戸市にある甲南大
2 学岡本キャンパスで開催する。本会常任委員会および地元の研究者を中心に組織された大会実行委員会は、大会の共通論題を
3 「五国の多様性と交流―兵庫地域史研究の新たな試み―」と決定した。本大会は、兵庫県で開催する初めての大会となる。
4 本大会で対象とする兵庫は、歴史的には慶応四年（一八六八）五月二三日に誕生した兵庫県を起点とする。初代知事伊藤博
5 文の名とともに知られるが、長崎や神奈川・新潟・箱館・大阪と並んで、開港場が起点となって成立した府県の一つである。
6 これは第一次兵庫県と称されるが、その後合併を重ね、明治九年（一八七六）に、ほぼ現在の県域として定着する。
7 現在、四一の市・町からなる県域を旧国でみると、摂津（一部）・播磨・但馬・丹波（一部）・淡路という五国にまたがっ
8 ている。これら五国は、都に近接した地域としての特性を持つとともに、都と西日本を結ぶ位置にある。巨視的にみると、日
9 本海側から瀬戸内の淡路まで、本州を南北につないでいる。また帯のように本州に収まり、東西の交通路は日本海・瀬戸内の
10 海路も山陰・山陽の陸路も兵庫県域を通過する。こうした複層的な交流は、地域の多様性を育み、今日の兵庫県の大きな特徴
11 となっている。五国という発想が生まれる所以である。

12 この発想は、一九九五年一月一七日に起きた阪神・淡路大震災にかかわって広がり、定着するに至っている。甚大な被害へ
13 の支援と復興への歩みを被災地域だけでなく、兵庫県域全体で進めようということから、「ひょうご五国」が強調されたので
14 ある。震災報道を使命とした地元紙・神戸新聞にも、「ひょうご五国」に関していくつかの長期連載があった。さらに歴史研
15 究に関係する分野では、神戸大学が先頭になつて歴史資料ネットワークの動きが生まれたことが特筆される。その結果、被災
16 地の復興と並んで、県域全体を見渡した歴史資料の保全活動が展開し、県内各地の地域史研究に新生面を開いている。問題
17 は、それらの動きが、兵庫の地域史研究として総合される方向性を持ちえないことである。新しい試みが求められる。
18 五国という場を設けた時、東西・南北の交通・交流の形態や諸地域の特色は、歴史的にはどのように見えてくるだろうか。
19 諸地域の特色と全体的な交通・交流のネットワークとは、どのように相互に影響を及ぼしたのだろうか。前提となる事柄を時
20 代順に概観してみよう。

21 五国は言うまでもなく古代律令国家が設けた国制に由来しており、その規定性は畿内近国という地域の特性とともに中世・
22 近世へと続く。律令国家が整備した山陽道などの官道と、大阪湾を含めた瀬戸内海の港津と海運という東西の交通体系も、五
23 国の歴史的展開に強い影響を及ぼした。また中国山地には比較的越えやすい峠があること、内陸部に位置する国・郡が河川交
24 通で海岸部と結ばれていることは、五国の地域を南北に繋ぐうえで決定的に重要であった。そこで考古学・文献史学の連携に
25 より、この地域の交通・交流が律令国家以前の地域性に規定されていることに留意しながら、律令体制・荘園制などの政治体
26 制で区切るのではなく、古代・中世を通じた地域の特色と交通・交流を考える。

27 つぎに近世であるが、五国は織田政権の版図となり、豊臣政権期には蔵入地や豊臣系大名が配置され、太閤検地により土地
28 支配・領主支配の均質化が進んだ。徳川政権成立以降、初期に播磨一国の大名領国支配があるものの、「大坂の陣」以降、分
29 割支配が進み、幕府による広域支配下の摂津・播磨・丹波のみならず、五国全体が幕府領・大名飛地領・中小大名領・旗本領
30 が錯綜する「非領国」的な地域となった。その結果、個別領主支配の枠組みによる中・小城下町や陣屋町を拠点とする領域的
31 纏まりが形成され、一つの特徴となった。その一方、酒造・綿業・銀山・たたら製鉄などの経済活動においては領域間の交流
32 が盛んであり、近世中後期には京都・大坂ばかりか江戸と繋がり、それは各地に旺盛な文化活動を促すこととなった。これら
33 地域的特質を踏まえた上での再検討が望まれる。

34 維新後全国的な府県創設の中、政府は五国を再編し広大で多様性に富む兵庫県を設置した。開港場とされた神戸を中心に、
35 欧米・ロシア・中国・朝鮮等と国際的な経済や文化の交流が始まった。四方の要所を結ぶ鉄道・港湾等の整備が全国的な視野
36 の下に進み、人と物、文化の交流が活発化した。酒造等伝統産業が生き残り、マッチ・紡績・造船・製鉄等近代工業の勃興、
37 都市への人口集中が進んだ。神戸・阪神間では大正期には全国的にも注目を受ける労働争議や貧民救済問題が出現し、第二次
38 世界大戦末期には米軍による戦略爆撃で産業と人口の集中した都市は大きな打撃を受けた。一方、但馬は、鳥取と並んで山陰
39 を構成する一地域となっていく。戦後は戦災復興に続いて、市町村合併や播磨地域の工業化等、発展がめざされたが、阪神・
40 淡路大震災後は、地域的な多様性に注目し、都市・農漁村等のあるべき姿が考え直されている。

41 全時代を通じて見いだせる兵庫の地域史の特徴は、五国にまたがる領域の広さにある。それは県内地域の多様性を生み出し
42 ており、その多様性は戦後、県内各地に郷土史研究会を生んだ。一方、自治体史の編纂や公立・私立の博物館・美術館・資料
43 館の設立が進められた。しかし、近年の少子高齢化・過疎化などにより、これまでの成果を集約する機会は急を要する。こう
44 した地域史の成果を元に、多様性と交流に着目して、地域史研究の視点から兵庫を捉えなおそうとするのは、時宜を得た試み
45 と理解する。

46 各地から多くの参加者を得て、さまざまな視点から活発な議論が交わされることを期待したい。